

第3章 まとめ

本研究では、「少年非行」、「逸脱」の成り立ちを社会的なものとして捉え、逸脱視される行動は決して普遍性を帯びたものではなく、そのときどきの社会的、文化的な期待を反映したものであることを示してきた。例えば、被調査者が若者であった頃は、「非行少年」、「不良」は、明示的な行動——髪を染める、奇抜な服装、喫煙など——をとる者として認識されていたようである。しかし現在は、このような若者の行動に対して、大人が極端に「逸脱視」することはなく、寛容さを示している。すなわち、若者が髪を染めたり、突飛な服装をしていたりしても、それは「逸脱」ではなく「個性の表現」として認識され、その行為をなすだけで「非行少年」、「不良」としてラベル付けをすることはない。逆に、大人は以前のように「見かけ」の上だけでは逸脱視されえない若者が、突然「キレル」ことの方に危惧を覚えている。また、被調査者は、若者の行動、交友関係が不可視になってきていることに対して、危機感を抱いていると異口同音に語る。確かに、現在でも若者の飲酒や喫煙に対して逸脱視する大人も存在する。しかし、それ以上に、今回のインタビューに参加した大多数の大人は、「つるんで」反社会的な行動をなす若者、「何をやっているのか分からない」不可視な行動をなす若者に対して逸脱のレッテルを貼る。このように、「非行少年」、「不良」に対する定義は、時代とともに変遷を辿り、普遍的な特性として一義に付与されるものではない。そしてまた、社会的なラベル付けにより可視的になるのである。

また、インタビュー結果より、以前（被調査者が若者であった頃）は、家庭であれ、地域の住人であれ、逸脱的な行為をなす青少年に対して大人が注意をする光景は一般的にみられたことが示された。そこには常に社会の「眼差し」があり、大人が子どもを叱る社会があった。青少年の逸脱的な行為を諫める、「社会の教育力」が十全に機能していた。そして、このような日常化した家庭、地域の大人が青少年を叱責することが、青少年の逸脱的な行為の抑止力として作用していたのである。

しかし、現在、大人は青少年を逸脱視するが、その逸脱的な行為に対して注意をするなど具体的な行動をとることはない、もしくはとりにくいと認識していることがインタビュー結果より明らかになった。つまり、異端視、逸脱視するだけで、具体的なかわりをもととしないという社会の構図が、青少年と大人との間に形成されてしまっているのである。

ただし、インタビューに応じてくれた大人の大多数が、青少年を「異端視するものの無視する」社会の構図を憂えている。そして、以前自分たちが経験したように、大人が青少年に対し

て積極的にかかわりを持てるよう、地域の連携をより強固にすべきだと考えている。このように大人が行動を起こすことで、すなわち、「大人社会の教育力」を再生することで、青少年の非行の抑制につながると認識している。具体的な提言としては、コミュニティの活動に若者を積極的に参与させるよう働きかける、学校を地域ぐるみの相互交流の場とする、地域住民との接触の機会をはかり、「顔見知り」の関係を構築する、といったような事柄があげられている。

これまで繰り返し言及してきたように、盲目的に非行少年や不良を異端視するに留まる社会の意識変容を図ることは、少年非行対策を見出すための有益な示唆を与えてくれる。インタビューに応じてもらった大人たちも、単に自分たちが経験した以前の社会を単に美化しているだけでなく、大人が若者を叱る社会を再生すること、大人の眼差し、教育力が機能する社会の再生こそが、少年非行の抑止の一翼を担うと認識しているのである。